

〈看護学科〉

基礎看護学

教授：田中 幸子 基礎看護学
 准教授：菊池麻由美 基礎看護学
 講師：羽入千恵子 基礎看護学
 講師：佐竹 澄子 基礎看護学
 講師：青木 紀子 基礎看護学

教育・研究概要

基礎看護学領域では昨年度より看護学科学学生の定員増を見据えて、教育内容および方法の検討を行い、看護の技術習得のための授業、演習、実習の方法を工夫し、少人数での学習を継続している。また、臨地実習では実習病院を拡大し、2病院6病棟で実施するようになった。

フィジカルアセスメントについての教授方法の検討および看護援助、看護診断に関する研究、看護技術習得のためのe-ラーニング導入における使用状況の調査を行った。これまでも基礎看護学領域で力を入れてきたフィジカルアセスメント教育についての研究では、看護学生の初期看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の習得状況を質的に明らかにし、実習および事前の講義や演習等の教授方法との関連を検討した。さらに臨床とも協力し研究を継続している。看護援助についての研究では、排泄および安楽、ポジショニングの技術に焦点を当てた準実験的デザインの研究を行っている。また、療養介護病棟でのフィールドワークに基づく運動機能障害患者への援助行為についての記述的研究および新たな看護診断ラベルの同定に向けた看護診断に関する研究にも続けて取り組んでいる。

〔点検・評価〕

看護実践能力の育成に向けて精力的に教育方法の検討を行った。特に、フィジカルアセスメント教育については研究結果からも一定程度の効果が確認できている。今後更に、日常生活の援助に関連した技術の習得にむけて、リアリティのある教授方法の工夫やe-ラーニングを用いた学習支援などを工夫していきたい。

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマをもって継続して研究を行っている。これ

までの研究成果は各学会で発表してきた。今後、これらを学術論文にまとめることが必要である。

研究業績

Ⅲ. 学会発表

- 1) 菊池麻由美, 羽入千悦子, 佐竹澄子, 青木紀子. 早期体験実習で看護学生は臨床状況を如何に経験するのか 2名の看護学生の「慣れてきた」経験に着目して. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月. [日看教会誌 2014; 24(学術集会講演集): 173]
- 2) 荒谷美香, 加邊隆子, 務台理恵子, 神谷瑞恵, 加藤紀代美, 菊池麻由美, 羽入千悦子, 青木紀子, 渡邊奈穂. 看護学生の早期体験実習前後の「看護師」イメージ 2種の看護基礎教育機関での調査から. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月. [日看教会誌 2014; 24(学術集会講演集): 133]
- 3) Tanaka S, Ogawa K (Tokai Univ), Kawahara K (Japanese Red Cross College of Nursing), Yumoto A (Dokkyo Medical Univ), Yarimizo K (Council for Maternal and Child Health Promotion). The historical research of legislative process of the eugenic protection act and maternal and child health administration in Japan. 25th International Nursing Research Congress. Hong Kong, July.
- 4) 田中幸子. (基調講演) 今, 戦争体験の史実を看護師が明らかにする意味. 第19回看護経済・政策研究会研究会. 東京, 1月.
- 5) 菊池麻由美. 筋ジストロフィー患者のための療養介護病棟で働くという経験. 日本筋ジストロフィー看護研究会第2回学術集会. 東京, 10月.
- 6) 菊池麻由美, 濱中喜代, 藤野彰子, 高橋 衣, 村田洋章, 堀川英起. 臨床倫理を如何に教育するか 医療系学生が共修する試みの経験から. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月. [日看教会誌 2014; 24(学術集会講演集): 94]
- 7) 佐竹澄子, 羽入千悦子, 大久保暢子. 対象の反応を捉える指標としての「副交感神経活動」に関する文献検討. 日本看護技術学会第13回学術集会. 京都, 11月. [日看技会講抄 2014; 13回: 173]
- 8) 渡邊奈穂. オーストラリア ヴィクトリア州における人員配置の遵守と労働環境改善に向けた取り組み. 第18回日本看護管理学会学術集会. 松山, 8月.
- 9) 松川香織, 羽入千悦子, 小田部友美, 高塚綾子, 菊池麻由美, 高島尚美. キャリア初期看護師のフィジカ

ルアセスメント実践する力の成長 指導する看護師の視点から. 日本看護技術学会第13回学術集会. 京都, 11月. [日看技会講抄 2014; 13回: 155]

- 10) 村田洋章, 菊池麻由美, 堀川英起, 藤野彰子, 濱中喜代. 看護学生と医学生が共修する臨床倫理に関する演習の試み. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月. [日看教会誌 2014; 24(学術集会講演集): 136]
- 11) Kawahara Y (Japanese Red Cross College of Nursing), Yumoto A (Dokkyo Medical Univ), Yarimizo K (Council for Maternal and Child Health Promotion), Tanaka S, Ogawa K (Tokai Univ). The historical research of Japanese administrative policy and outcome of maternal and child health education. 25th International Nursing Research Congress. Hong Kong, July.
- 12) Yumoto A (Dokkyo Medical Univ), Yarimizo K (Council for Maternal and Child Health Promotion), Tanaka S, Ogawa K (Tokai Univ), Kawahara Y (Japanese Red Cross College of Nursing). Regional maternal and child health efforts by nurses, local residents, and civic organizations from 1936 in Japan. 25th International Nursing Research Congress. Hong Kong, July.
- 13) 西村ユミ, 村上優子, 菊池麻由美, 田代幸子. 看護実践の「質」と現象学的研究 看護師が「職場を変えること」に焦点を当てて. 保健医療社会学会. 仙台, 5月. [保健医療社論集 2014; 25(特別): 92]
- 14) 孫 大輔 (東京大), 内海美保 (神戸学院大), 川村和美 (シップヘルスケアファーマシー東日本), 鈴木佳奈子 (家庭支援協会/4UrSMILE), 坪田康佑 (一般社団法人医療振興会), 中島美津子 (南東北グループ), 根岸哲史 (医療法人社団一心会), 渡邊奈穂, 池上敬一 (獨協医科大). (事例検討会2) インストラクショナルデザインを用いた多職種連携教育プログラムの開発. 第7回日本医療教授システム学会総会. 東京, 3月.

IV. 著 書

- 1) 田中幸子. 2章: 看護師の生活と労働. 日本看護歴史学会編. 日本の看護のあゆみ: 歴史をつくるあなたへ. 東京: 日本看護協会出版会, 2014. p.27-42.

V. その他

- 1) 篠原國造(元ヘルスケア労協事務局長), 末安民生(天理大), 田中幸子, 野村陽子(京都橘大), 天田城介(立命館大). 巻頭特集: 看護 座談会「看護論 この30年の看護をめぐる変容」. 生存学 2015; 8: 8-51.

看護管理学

教授: 永野みどり 看護管理学・褥瘡ケア・ストーマケア

教育・研究概要

I. 教育

学部の教育として, 前期の3年生の必修科目「看護マネジメント」と後期の2年生の必修科目「看護情報管理学」は, 専任教授の永野みどりが担当した。看護総合演習Ⅲは, 複数の担当教員の1人として担当した。総合実習において, 2名の4年生の「看護マネジメント」実習を担当した。4年生の必修科目「卒業研究」2名の研究指導を担当した。

II. 研究

1. ストーマ外来のケアニーズに関する研究

研究対象は, 1つの特定機能病院における週に2回実施しているストーマ外来の利用者である。診療記録より2008年1月から2014年7月までに直腸がんでストーマを造設しストーマ外来を利用したストーマ保有者の受診状況を調査した。調査内容は, 患者属性, 入院期間, 術式, ストーマ外来利用時期, 皮膚障害の有無, ストーマ装具の変更頻度等であり, ストーマ外来のニーズについて, 変数に応じて検定によって検討した

男性69名, 女性32名からなる合計101名のストーマ保有者の情報を得て, ストーマ外来の利用や, ストーマ皮膚障害の発生などの現状が明らかになった。次のような条件のストーマ保有者は, ストーマ外来の利用頻度や期間が長いことが分かった。1) 在院日数が高い, 2) 高齢者, 3) 肥満者, 4) イレオストミー保有者, 5) 糖尿病の罹患者。長期にわたるセルフケア支援のニーズがあるストーマ保有者のセルフケア支援には, 訪問看護との連携の重要性が示唆された。

2. 看護実践環境に関する研究

平成26年度科学研究費助成事業(研究種目) 基盤研究(B)による補助金の交付を受けて研究分担者として研究を実施する(課題番号) 24390476(研究課題名) 看護職のHealthy Work Environment特性の解明と管理者支援に係る分担金の分担金260,000円を得て, 共同研究者として, かかわった。特に, 質問紙調査結果の「看護師長のストレスである困難感と内的動機づけであるやりがいの内容と看護師長の健康に及ぼす影響」について, 分析した。指標と

してK6を用い、看護師長の健康とマネジメントの困難感とやりがい感を検討した。看護師長のマネジメントの困難感とやりがい感との健康への関連、ならびに看護師長にとって看護部長との相談の重要性が明らかになった。

〔点検・評価〕

学部教育において、前年度の経験を生かして、授業などを工夫して更新した。看護マネジメントは、主体的に学ぶ機会として、学生に専門用語や理論の解説のようなそれぞれ異なる課題を課し、プレゼンテーションして、相互の学習の機会とした。一部の学生は熱心に自己学習とプレゼンテーションをすることができ、関心を持つ機会にすることができた。看護情報管理論の演習では、グループワークではなく、個人作業の課題を主体とした。グループワークの貢献度の違いによるクレームはなくなったが、個々のフィードバックは昨年に引き続き困難であった。また、個人作業では、調査や分析の意義等を深めることが困難なので、グループワークと個人作業との使い分けが今後の教育方法の検討課題である。

研究においては、原著1つと学会発表が筆頭演者として3つ、共著者として5つの演題を発表できた。学会に発表した研究の原著の作成が課題である。データ入力や英訳等の委託費が不足しており、競争的な研究費の獲得も重要な課題である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 永野みどり, 緒方泰子 (東京医科歯科大), 徳永恵子 (宮城大), 石久保雪江 (浜松医科大), 石田陽子 (山形大), 皮膚・排泄ケア認定看護師の病院における褥瘡ケアの質に対する主観的影響力と褥瘡の発生率からみた効果的な褥瘡対策. 日創傷オストミー失禁管理会誌 2014; 18(3) : 293-304.

III. 学会発表

- 1) Nagano M, Tokunaga K (Miyagi Univ), Tsukada K (Takaoka Ekinan Clinic), Andou Y¹⁾, Mamada E¹⁾ (¹Tokyo Medical Dental Univ). Requirements at a stoma clinic in a large-scale hospital in Japan. World Council of Enterostomal Therapists 20th Binnial Congress (WCET 2014). Gothenburg, June.
- 2) 永野みどり, 緒方泰子¹⁾, 徳永恵子 (宮城大), 塚田邦夫 (高岡駅南クリニック), 安藤禎子¹⁾, 俣田悦子¹⁾ (¹東京医科歯科大). 在宅療養指導料を算定できない受診間隔でのストーマ外来利用の実態. 第23回

日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会. さいたま, 5月. [日創傷オストミー失禁管理会誌 2014; 18(2) : 218]

- 3) 永野みどり, 緒方泰子¹⁾, 勝山美貴子 (横浜市立大), 田中幸子, 佐藤可奈¹⁾ (¹東京医科歯科大), 菅田勝也 (藍野大). 病院の看護師長における健康障害と職務遂行に影響する環境-マネジメントの困難感とやりがい感に着目して-. 第52回日本医療・病院管理学会学術総会. 東京, 9月. [日医療病管理会誌 2014; 51(Suppl.) : 188]
- 4) 勝山美貴子 (横浜市立大), 緒方泰子¹⁾, 田中幸子, 佐藤可奈¹⁾ (¹東京医科歯科大), 菅田勝也 (藍野大). 看護者が認識する組織文化, 心理学的エンパワーメントの特性と離職意向, キャリア継続意思の関連. 第52回日本医療・病院管理学会学術総会. 東京, 9月. [日医療病管理会誌 2014; 51(Suppl.) : 198]
- 5) 緒方泰子¹⁾, 勝山美貴子 (横浜市立大), 田中幸子, 永野みどり, 菅田勝也 (藍野大), 佐藤可奈¹⁾, 安川文朗¹⁾ (¹横浜市立大), 橋本廸生 (日本医療機能評価機構). マグネット病院特性からとらえた看護実践環境等と看護職の退職行動との関連. 第52回日本医療・病院管理学会学術総会. 東京, 9月. [日医療病管理会誌 2014; 51(Suppl.) : 200]
- 6) 佐藤可奈¹⁾, 緒方泰子¹⁾ (¹東京医科歯科大), 勝山美貴子 (横浜市立大), 田中幸子, 永野みどり, 菅田勝也 (藍野大). 看護職が経験する職場におけるいじめと健康状態および看護の質との関連. 第52回日本医療・病院管理学会学術総会. 東京, 9月. [日医療病管理会誌 2014; 51(Suppl.) : 199]

IV. 著書

- 1) 永野みどり. 第2部: 医療依存度の高い療養者と家族への援助 第8章: 褥瘡ケア. 渡辺裕子 (元・家族ケア研究所) 監修. 家族看護を基盤とした在宅看護論 II : 実践編. 第3版. 東京: 日本看護協会出版会, 2014. p.124-38.

成人看護学

教授：高島 尚美	周手術期看護学，クリティカルケア
教授：佐藤 正美	がん看護学，緩和ケア
講師：瀬山 留加	がん看護学，緩和ケア，家族看護
講師：村田 洋章	周手術期看護学，クリティカルケア
講師：中野真理子	周手術期看護学，国際看護学
講師：寺門 亜子	がん看護学，緩和ケア
講師：細川 舞	がん看護学，がん化学療法看護，緩和ケア

教育・研究概要

学部教育としては、概論および健康レベルに応じた4つの臨床看護学（慢性期・周手術期・がん・急性期）を学内授業で学び、慢性期および周手術期看護学実習で看護実践能力として習得するプロセスを重視し、教育評価を実施した。研究においては、各教員が、がん看護学分野および急性・重症患者看護学分野におけるテーマを追究した。

I. 教育

成人看護学においては、対象理解に基づいた問題解決的思考を育成するために看護過程の展開を重視した教育を展開している。これまでの教育評価も踏まえて、平成24年度新カリキュラムから新設した、クリティカルシンキング能力育成を目的にした「成人看護実践論」の開講年度であった。科目内容と展開方法は、手術患者の看護の急性期から回復期までをグループ学習によるPBL要素や演習を取り入れながら看護過程の展開をした上で、演習での体験をするというアクティブラーニングとした。その結果、学生からの授業評価では、授業方法3.73、授業内容3.40、グループワーク3.75、自分の学習態度3.33といずれも学年平均値を上回る高い成果が得られた。慢性期看護学実習では、最終日に全体カンファレンスを実施したことでの学びの共有効果が得られた。成人看護学実習全体として、看護過程の展開における情報収集を含めたアセスメントや看護計画を活用した実践に対する学生評価は概ね肯定的であったが、教員評価としては部分的に低い傾向があり今後の継続的課題である。

実習環境・体制整備においては、臨床実習指導者

と振り返りを行うことで連携を強化した。看護実践能力を獲得するためには、実習経験を学生自身が意味づけ、主体的に学習することが重要である。学生は、教員が臨床の場に居て適時振り返りをする、記録を基に看護過程展開に対するヒントを出す、ともに実践する、安全を確保する、などの教育的介入に対して概ね肯定的に評価をしていた。これらは継続したい点であり、今後も関係者と役割分担を調整し、適切な相互作用をしながらの実習指導が期待される。

II. 研究

1. がん患者の看護に関する研究

1) 直腸がん前方切除術後患者の排便障害を軽減する看護支援に関する研究

前方切除術後に特徴的な排便障害を軽減する看護方法の開発を進めている。本年度は、その効果を検証する研究を分析し、一定の効果があつたことを確認した。効果が期待できる看護援助を、医師と協同して臨床の場で実践した。その活動を基にWOCナースとの連携も含め、医師との連携について考察し、学会発表した。今後は、一定の効果を検証した看護支援プログラムをさらにブラッシュアップし、臨床において実践可能性の高い方法を作成する予定である。

2) 外来放射線療法を受けるがん患者と家族員への支援に関する研究

外来放射線療法を受ける患者と家族員の心理・社会的苦痛に対する支援モデルの開発を進めている。文献検討（一昨年度）や臨床家からのインタビュー（本年度）により、対象者の年齢や機能レベルを限定した集団に対し、介入を行う必要があることを明らかにした。その結果、今後は、第一段階として加齢による認知機能の低下を伴うがん患者とその家族を対象とした支援モデルの検証を行うこととなった。

3) がん化学療法に伴う末梢神経障害に関する研究

多施設との共同研究として、がん化学療法に伴う末梢神経障害の尺度開発を進めている。一昨年度から開始したデータ収集を継続して行い、総施設の合計が310名となったために終了となった。今後は、尺度因子の決定に向けた統計処理を行う予定である。さらに、支援プログラムに関する検討も始める予定である。

2. 急性・重症患者の看護に関する研究

1) ICU入室患者のストレス経験の分析

ICUに入室し24時間以上人工呼吸器を装着して

いる患者のストレス経験に関する研究を継続している。1施設のGICUに入室し12時間以上人工呼吸器管理を受けた認知障害のない成人患者を対象に、ICU Stressful Experiences 質問紙を用い構造的面接法で聴取し関連要因を診療録から収集し分析した。その結果、96名のデータが得られた。強いストレス経験項目は、“のどの渇き”“会話のしづらさ”“気管チューブの不快”等で、関連要因は、緊急入室、挿管時間、既往の無さ、麻薬総使用量、等であった。今後は、ICU入室患者の症状や心理的、霊的苦痛を緩和するためのケアを検討したい。

2) 人工呼吸器装着患者への看護支援プログラム開発

人工呼吸器装着中の患者の体験を明示しつつ、プログラム構築するためにデータ分析が終了し論文執筆段階にある。本研究では、現在のところNPPVを受ける患者の体験が明らかになりつつあり、今後、論文投稿しつつ、プログラム開発並びに介入効果検証を行って行く予定である。

3) クリティカルケア領域におけるベテラン看護師の身体抑制に関する看護実践プロセス

看護師の身体抑制という看護実践の中に埋め込まれている看護師の臨床の「知」を形式知として可視化することを目的に、看護学生・新人看護師・ベテラン看護師の臨床の「知」の発達の構造を探求中である。

ベテラン看護師の看護の実践には、患者理解の深さと看護の方向性は常に抑制解除に向かっているという特徴があった。確固たる『命を守るというゆるぎない信念』に突き動かされ、＜五分五分の安全と安楽の狭間で葛藤＞＜インシデントに心を痛める＞という『痛み・葛藤』を感じながら『ベテラン看護師としての責任を果たす』と同時に先輩、リーダーなどの『役割の使命を果たす』ことをしながら『深い患者の理解と抑制解除に向かう看護実践』を行っていた。

家族への看護の実践プロセスとして18の概念が生成され、6つのカテゴリーが抽出された。看護師はまず、『家族の思いを推測』し、『家族のショックを吸収する』ことを行い、『抑制について理解していただく』ことに重きを置いていた。次に『ケアへの巻き込み』を進め、家族が『“尻込み”から“前向き”になれるよう支援的に関わっていた。その実践プロセスに通底するものは、＜「抜くと怖いから抑制してください」という家族の言葉に甘えない＞という『貫く信念』があった。

〔点検・評価〕

教育においては、教育評価に基づき、問題解決能

力を高める科目を企画運営したことで、より効果的な内容・方法で教育を実施することができた。今後の取り組み事項として、科目運営では、さらに学生の問題解決能力を高めるための批判的思考や人間関係能力育成の必要性がある。学習内容が抱負になりすぎの傾向も予測されるため、授業評価による改善を継続する必要がある。実習教育においては、学生数増を視野に入れ実習フィールドを開拓したため、環境調整を行い充実した教育を継続したい。教員体制として、成人看護学慢性期領域教授と講師の新規着任が1月となり、成人看護学領域全体で協力して教育や組織運営を実施した。

研究においては、教員の7割近くが外部資金を獲得し、それぞれが積極的に取り組んでいる。今後も研究内容を教育に還元すべく、学会発表のみならず論文文化することが課題である。そのために、学内・学外研究者とも協力し、時間や環境のマネジメントをしながら取り組んでいきたい。

研究業績

II. 総説

- 1) 深井喜代子, 齋藤やよい, 田中裕二, 佐伯由香, 高島尚美, 吉田みつ子. 論文投稿のA to Z (その2) ケア技術を看護学発展の基礎となるもの. 日看技学会誌 2014; 13(1): 20-1.

III. 学会発表

- 1) 深井喜代子, 角濱春美, 田中裕二, 高島尚美, 前田ひとみ. (交流セッションIV) 論文投稿のA to Z (その3) 研究成果を公表することの義務と意義. 日本看護技術学会第13回学術集会. 京都, 11月.
- 2) 茂木宏二, 高島尚美, 村田洋章. 人工関節置換術を受けた患者における術中体温の影響因子の分析. 日本看護研究学会第40回学術集会. 奈良, 8月.
- 3) 高島尚美. (看護部門 教育講演2) 看護研究—文献を臨床に活用するには—. 第42回日本集中治療医学会学術集会. 東京, 2月.
- 4) 川原千香子, 高島尚美. 植込み型除細動器装着患者家族の装着から3ヵ月までの経験. 第10回日本クリティカルケア看護学会. 名古屋, 5月.
- 5) 高島尚美. (看護部門 ワークショップ: 編集委員会企画) とにかく看護研究をやってみよう! 第42回日本集中治療医学会学術集会. 東京, 2月.
- 6) 松川香織, 羽入千悦子, 小田部友美, 高塚綾子, 菊池麻由美, 高島尚美. キャリア初期看護師のフィジカルアセスメント実践する力の成長 指導する看護師の視点から. 日本看護技術学会第13回学術集会. 京都, 11月.

- 7) 中野真理子, 西開地由美, 高島尚美, クリティカルケア領域における身体抑制に関わる学生の「看護」の学びのプロセス, 日本看護技術学会第13回学術集会, 京都, 11月.
- 8) 上田佳余子(筑波大), 佐藤正美. 一般病棟でがん看護に携わる経験の浅い看護師の困難, 日本看護学教育学会第24回学術集会, 千葉, 8月.
- 9) 秋元典子(岡山大), 森田敏子(徳島文理大), 大塚真理子(埼玉県立大), 佐藤正美, 泊 祐子(大阪医科大), 石井範子(秋田大), 岡山寧子(同志社女子大), 雄西智恵美(徳島大), 川原礼子(福島県立医科大), 水野照美(佐久大), 和住淑子(千葉大). 採択される論文を書くために 不採用理由の分析と看護学教育研究における倫理的配慮, 日本看護学教育学会第24回学術集会, 千葉, 8月.
- 10) 佐藤正美, 榎本剛史¹⁾, 谷澤伸次¹⁾, 田村孝史¹⁾, 荒井志保¹⁾, 村田聡一朗¹⁾, 小田竜也¹⁾, 大河内信弘¹⁾(筑波大). 排便ケア向上への提言術後排便障害に対する医師・看護師による連携診療の取り組み, 第69回日本大腸肛門病学会学術集会, 横浜, 11月.

IV. 著 書

- 1) 佐藤正美. パートII: 実技編 IV章: 術後合併症と予防のための看護技術 4. 術後感染, 5. 縫合不全. 雄西智恵美(徳島大), 秋元典子(岡山大)編. 成人看護学: 周手術期看護論, 第3版, 東京: ヌーヴェルヒロカワ, 2014. p.186-201.
- 2) 佐藤正美. 第1部: 健康危機状況 2. 健康危機状況における看護方法の検討 3. 生活行動の変更への支援. 吉田澄江(東京女子医科大), 鈴木純恵(獨協医科大), 安酸史子(防衛医科大学校)編. ナーシング・グラフィカ: 成人看護学②: 健康危機状況/セルフケアの再獲得, 大阪: メディカ出版, 2015. p.84-94.
- 3) 佐藤正美. 第2部: 周手術期看護 第IV章: 事例で考える周手術期看護 6. 排泄機能の再確立①低位前方切除術. 林 直子(聖路加国際大), 佐藤まゆみ(千葉県立保健医療大)編. 看護学テキスト NiCE: 成人看護学 急性期看護I: 概論・周手術期看護, 改訂第2版, 東京: 南江堂, 2015. p.229-48.

老年看護学

教授: 櫻井美代子 老年看護学
准教授: 草地 潤子 老年看護学

教育・研究概要

平成24年改正カリキュラムに伴い, 実習については3年次と4年次とで履修する内容を整理し, 老

年看護学実習Iを医療機関で療養中の高齢者への家庭復帰に向けた支援, 老年看護学実習IIを地域での高齢者の保健医療福祉における自立支援を学ぶ実習とした。本年度は老年看護学実習Iを初めて実施した。学生は受け持ち患者の看護過程を展開し, 対象に必要なケアを実践する中で, 多職種との連携・協働や退院までの必要なプロセスについて学びを深めることができた。次年度開始する老年看護学実習IIでの新たな実習施設の開拓を行い, 実習体制を整備した。

研究活動では領域として取り組んでいる研究は以下の2つである。

「要介護高齢者の主体的活動を支援する運動プログラムの開発—下肢浮腫軽減への下肢三頭筋ストレッチの効果」の結果については, 第34回日本看護科学学会学術集会で発表した。さらに関連領域における知見の探求を継続し, 「高齢者の座位姿勢援助におけるクッションの選択による座位姿勢, 下肢浮腫, 血流への影響比較」の研究に取り組んでいる。

「褥瘡予防と治癒を促進する技術」の看護基礎教育内容についての検討」の研究成果を日本看護研究学会第40回学術集会で発表した。

「点検・評価」

授業・演習では, 昨年度の評価を踏まえ, 内容を吟味して実施した。学生の授業内容の理解度や, 興味・関心, さらに改善すべき箇所を特定することができた。研究活動については, 領域構成員のそれぞれの研究テーマを遂行し, 学会発表, 学術論文にまとめることが課題である。

研究業績

III. 学会発表

- 1) 坂東美知代, 荒木美名子, 草地潤子, 櫻井美代子. 要介護高齢者の主体的活動を支援する運動プログラムの開発 下肢浮腫軽減への下腿三頭筋ストレッチの効果, 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 11月.
- 2) 草地潤子, 坂東美知代, 荒木美名子, 櫻井美代子. 「褥瘡予防と治癒を促進する技術」の看護基礎教育内容の検討, 日本看護研究学会第40回学術集会, 奈良, 8月.

精神看護学

教授：香月 毅史 精神看護学
講師：石川 純子 精神看護学

教育・研究概要

教育では、概論、対象論、方法論の流れを踏まえ、社会的視点、生物学的視点、心理学的視点からポイントを整理して理解できる講義を考案した。1年生の精神看護学概論では、近年のセルフヘルプ、ピアサポートの活動例を紹介し、メンタルヘルスが学生の身近な問題として再認識できる機会を多く設けた。講義では、基本的学習内容を網羅し、その上で学生自身が興味を抱く内容についてさらに詳しく学ぶ機会として、DVD ビジュアル教材を使用し、さらに海外の精神医療事情を紹介することで日本の精神医療を客観視する視点を育てることを目標とした。また、精神保健の対象を患者に限定せず、学生自身が自分もまた対象の一人であることを意識できる講義を心がけた。2年生の精神看護対象論では、精神医学研究の医師が代表的な精神疾患の原因、症状、薬効、副作用を専門家の視点から解説した。その後、看護師の視点、当事者の視点から疾患を抱えた生活を捉え直し具体的な看護問題を考察する授業を行った。また、精神科医療の特徴的な視点を重視し、看護師自身のメンタルケア、家族ケア、地域での生活援助等、他の領域との連携について考察する機会を多く設けた。また、精神看護方法論では、精神保健福祉法を基本法として行われる現在の日本の精神医療・精神看護について、対象者の行動制限のとりえ、支援の在り方についてクリティカルな視点で考察する能力を育てることを目標とした。臨地実習では、精神科の臨床現場で、実際の患者と接することで実際の患者の思いを受け止め、共に考えることを学ぶ。患者-看護師関係が支援される側と支援する側の関係だけでなく、看護師が患者と共に生活し、病棟の環境を「耕す」という精神科特有のダイナミズムも学習目標であった。4年次の総合実習では、目的目標を再度検討し、精神科スーパー救急病棟でクリティカルパスに沿って早期治療に挑む最新医療を体験する機会と退院後の生活に向けたリハビリテーション医療を体験する機会を設定した。

研究活動は、東日本大震災後の一般市民の精神的影響について継続的に調査を行っている。2014年度は、全国データを集計した。中間集計の結果は10月の第16回環太平洋精神医学会議（16th Pacific

Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting）で発表した。

また、ヒューマンケアリングアプローチとディスコース分析の研究も継続的に行っている。

〔点検・評価〕

学生からのフィードバックは、毎回授業後のリアクションペーパーの内容から把握し、それに対する教員からのフィードバックを学生に返すことができるように工夫した。学外の当事者によるピアサポートグループを招いて直接語り合う機会を設定することで、学生の患者・当事者に対するイメージが多様化した。座学では難しいことも、実体験で容易に獲得できる好例であった。

課題であった学外の研究費の獲得については、2014年度は科学研究費補助金による研究を継続するという形で達成された。

研究業績

Ⅲ. 学会発表

- 1) Katsuki T, Moriyama A (Saitama Prefectural Univ), Sato C (Ohtsuka Medical Clinic). Factors affecting mental wellness among public on the east Japan earthquake: a national survey 18 months later the event. PRCP 2014 (16th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting). Vancouver, Oct. [Asia Pac Psychiatry 2014; 7(SupplS1): 12]
- 2) Ishikawa J, Noro I, Oka M¹⁾, Motegi E¹⁾ (¹Gunma Univ). Practice of nursing counseling to a chronic schizophrenic person living in community in Japan: application of narrative approach. 7th International Conference of Health Behavioral Science (7ICHBS). London, Sept.
- 3) 石川純子, 川野雅資 (山陽学園大). 精神看護学におけるDVD教材活用の検討 (退院時家族編). 第34回日本看護科学学会学術集会. 名古屋, 10月. [日看科学会講集 2014; 34回: 643]

小児看護学

教授：濱中 喜代 小児看護学
准教授：高橋 衣 小児看護学

教育・研究概要

教育では学生数の増加に合わせて、演習、技術教育、看護過程の展開等の教育方法を見直し強化を

図った。また小児看護学実習や総合実習において、より小児看護の専門性が高まるように、臨床指導者の協力の基、さらに指導を丁寧に進め、効果的が得られている。

I. 看護師の倫理教育受講経験と子どもの権利擁護実践の現状

関東圏内の大学病院・小児専門病院・一般病院の計8施設の小児看護に携わる看護師295名を対象に、自記式質問紙を用いた調査により、倫理教育受講経験と「子どもの権利」を擁護する看護の現状を明らかにした。倫理教育受講経験は7割であるが、学習内容が定着していない現状があった。「子どもの権利」擁護について、倫理教育受講経験者の4割が実践しており、6割が時々実践・努力傾向にあった。さらに、子どもの権利侵害場面への対処では、小児経験年数の浅い看護師が倫理的実践に至っていない傾向にあった。施設別では、大学病院・小児専門病院に比べ、一般病院が子どもの権利擁護が低い傾向にあった。また、質的分析も行った。これらのことから、小児経験年数の浅い看護師が倫理的実践に至っていない理由として、看護基礎教育と現任教育での倫理教育の問題、新人看護師の置かれている状況、小児病棟の特徴、日本の文化的影響が考えられた。

II. 看護基礎教育における「看護倫理」と「子どもの権利」擁護の教育の現状

全国の看護基礎教育機関214校の小児看護領域担当教員を対象として、自記式質問紙を用いた調査により、看護基礎教育における看護倫理と子どもの権利擁護の教育現状を明らかにした。看護倫理に関する教育は9割の学校が実施しており、看護学概論1～2コマの講義が48%と最も多く、単元として「看護倫理」の実施割合は12%であった。看護倫理に関する教育の現状認識は、十分にできている44%、十分とは思えない41%に認識が分かっていた。子どもの権利擁護に関する教育は、すべての学校で実施され、小児看護学概論・小児看護方法論（援助論）・小児看護学実習でそれぞれ展開されていたものの、いずれも知識に留まる傾向にあった。また、方法論・実習においては、子どもの権利擁護に関する教育内容は、小児看護学概論に比べ少ない傾向にあった。教育の現状認識では、教育の現状について大学短大では満足傾向にあり、専門では満足していない傾向にあった。今後、教育方法を検討していきたい。

III. 小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセス

小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践に至るプロセスを明らかにすることを目的とした質的帰納的研究である。対象は、関東圏にある大学附属病院3施設の小児看護経験5年以上の看護師14名である。結果、コアカテゴリー【子ども中心に考える力】の発展プロセスとして明らかになった。発展プロセスは、〈指示のままに動き、自分で考えられない〉〈非言語化されたルールに従ってしまう〉〈子ども中心に考える力を形成し一歩踏み出す〉〈子どもの立場に立ち皆を巻き込んで実践する〉の4段階で構成されていた。さらに、【子ども中心に考えられる力】の強まりに影響をもたらすのは、〈子どもの力の確信〉〈子どもの力を伝える工夫力〉〈子どもに引き寄せられる思い〉の3つの力であった。発展プロセスは、小児の臨床場面、看護基礎教育、現任教育、研究に適用し、看護師の子どもの権利擁護実践をより早く可能にできることが考察された。

IV. 軽度発達障害児の親が抱く入院での対応・環境・治療やケアに関するニーズと支援の在り方

過去に小児病棟に入院経験のある軽度発達障害児の親へのインタビュー調査から、軽度発達障害児の親が抱く入院での対応・環境・治療やケアに関するニーズを明らかにする目的の研究に着手した。

「点検・評価」

Iの研究については成果を学術雑誌に論文として掲載できたことにより、広く他大学の方がたと共有できたことは意義があった。IIの研究については分析結果をまとめ学術集会で発表することができ、参加者の方から活発な反応が得られ、研究に対する考察が深まった。IIIの研究については、明らかになったことを基に、さらに検証をすすめ発展プロセスを高めるための評価表作成につなげていきたい。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 高橋 衣, 濱中喜代. 看護師の倫理教育受講経験と子どもの権利擁護実践の現状. ヘルスサイエンス研 2014; 18(1): 21-31.

III. 学会発表

- 1) 高橋 衣, 濱中喜代. 看護基礎教育における「看護倫理」と「子どもの権利」擁護の教育の現状. 日本小

見看護学会第24回学術集会, 東京, 7月.

- 2) 石井まりえ, 濱中喜代, 高橋 衣. 小児看護学テキストにおける「子ども」の表現についての分析. 日本小児看護学会第24回学術集会, 東京, 7月.
- 3) 村田洋章, 菊池麻由美, 堀川英起, 藤野彰子, 濱中喜代. 看護学生と医学生が共修する臨床倫理に関する演習の試み. 第24回日本看護学教育学会学術集会, 千葉, 8月.
- 4) 嶋澤順子, 佐竹澄子, 久保善子, 高島尚美, 北 素子, 高橋 衣, 濱中喜代. ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育評価. 第24回日本看護学教育学会学術集会, 千葉, 8月.
- 5) 村田洋章, 嶋澤順子, 高橋 衣, 瀬山留加, 久保善子, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子. electronic-portfolio 活用を始めた学生の主体的学習能力とその影響因子の検討(第1報). 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 11月.
- 6) 瀧田浩平, 濱中喜代. 入院中の軽度発達障害児との関わりに対する看護師の認識とその関連要因. 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 11月.

V. その他

- 1) 久保善子, 嶋澤順子, 北 素子, 高島尚美, 高橋 衣, 佐竹澄子, 濱中喜代, 櫻井美代子. ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育評価. 慈恵医大誌 2014; 129(3): 119-27.

母性看護学

教授: 茅島 江子 女性の健康と看護ケア
 准教授: 細坂 泰子 周産期ケア, 新生児清潔ケア, 育児

教育・研究概要

女性のライフスタイル各時期における様々な健康問題について研究し, 母性看護における看護援助のあり方について考察した。

I. 産後4～5ヶ月の女性の性交再開に関する要因の分析

本研究は産褥期における性機能の回復の実態および関連する要因を明らかにし, 産後の女性とそのパートナーが順調に性生活を送ることができるための具体策の提案ができ, 産後の性生活指導への示唆を得ることである。回収数は166名(回収率38.2%), 有効回答数は152名(有効回答率91.6%)であった。平均年齢は32.25±4.67歳で, 性交再開なしは70名(46.1%), あり82名(53.9%)であっ

た。性交再開している人において平均再開週数は10.26±5.09週であった。産後4～5ヶ月で性交を再開している人は, 年齢が若い人, 月経が再開している人, 妊娠前・妊娠中の性交回数多い人ほど多かった。

II. しつけと虐待の境界に対する記述的研究

本研究は, 学童前児童を養育する母親が子供へのどのような養育行動をしつけもしくは虐待と認知するのか, その境界を記述することで育児不安を起こす養育行動をあぶり出し広く周知することで母親を支援する示唆を得ることである。研究は2部構成となっており, 現在研究1の「学童前児童を養育する母親から語られる育児体験」について, 26名の母親に半構造化面接を行い, 3つの異なる視点からそれぞれ7, 12, 6のカテゴリーが抽出された。現在m-GTAで分析中である。

III. 新生児清潔ケアの構築: 新生児の匂いと細菌学的調査から

本研究では27名の新生児に対してランダム化比較試験を用い, 新生児の体温変化, 細菌数変化, 匂い指数, 体重変化の客観的指標を比較検討し, 最適な新生児清潔ケアを構築することを目的とした。データ上の沐浴群とドライテクニク群の属性に有意差はなく, 比較が可能と考えられた。正期産で低出生体重児を除いたランダム化比較試験による新生児の清潔ケアの結果から, 沐浴群, ドライテクニク群による新生児の体重, 体温, 黄疸値, 母乳回数, 皮膚水分量, 頭部の匂い値, 臍周囲の細菌数のいずれも有意な差は見られなかった。

IV. 母体搬送コーディネーターの助産師配置に関する課題と教育プログラムの開発

日本で母体搬送コーディネーターを設置しているのは14都道府県で, その地域のコーディネーター, 救急隊, 産科医師に質問紙調査を実施した結果, 妊産婦の救急搬送で最も重要視する情報において職種間で差がみられた。また, 周産期搬送に困難を要する要因や課題についてはすべての職種で未受診妊婦に関連した問題が示された。コーディネーターに求められる役割や能力として, 周産期に関連した医学的知識, 予測をふまえた判断力, 連携に必要なコミュニケーション能力, 交渉力があげられ, その内容を組み込んだ研修や学習機会が必要であることが示唆された。

「点検・評価」

産後4～5ヶ月の女性の性交再開には、年齢、月経の再開、妊娠前・妊娠中の性交回数に影響することが明らかになった。今後は、それらを考慮に入れ、性生活指導のあり方について検討していく予定である。

しつけと虐待の境界に対する記述的研究では、日々の養育に悩む母親の揺れる気持ちがあぶりだされた。他者との関わり、母親自身の内省、子どもとの関係性の3つの視点から、分析を進めていく予定である。

新生児清潔ケアは正期産であればどちらのケアでもバイタルサイン等の客観的指標および細菌学的評価で有意ではなかった。しかし今回のデータの対象人数が少ないことからデータが有意でなかった可能性もある。今後はより多くの症例で分析する必要がある。

周産期救急搬送におけるコーディネーター、救急隊、産科医師の実態を調査したことで、コーディネーターに求められている役割や能力を明らかにするための詳細なデータを得ることができた。今後、コーディネーター、救急隊、産科医師、それぞれの職種で詳細な分析を加える予定である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 細坂泰子. 妊婦・やせ妊婦の低出生体重児出産予防に向けた母体体重管理モデルの構築. 母性衛生 2014; 55(2): 360-8.

III. 学会発表

- 1) 茅島江子. 月経らくらく講座－月経と性の健康支援－. 第22回ちば思春期研究会. 千葉, 7月.

IV. 著書

- 1) 茅島江子. 第6章:ヘルスプロモーションと性の健康 3. 性成熟期 ④産後(産み上げ後)の性生活への支援. 公益財団法人性の健康医学財団編, 齋藤益子(東邦大)編集代表. 性の健康と相談のためのガイドブック. 東京:中央法規出版, 2014. p.152-3.

地域看護学

教授: 嶋澤 順子 地域看護学
講師: 久保 善子 地域看護学
講師: 上田 修代 地域看護学

教育・研究概要

地域看護学では、教員が各々に3つの研究テーマについて取り組んでいる。1つ目は、独立型訪問看護ステーション看護師による在宅精神障害者地域生活支援モデル開発に関する研究である。在宅精神障害者の地域生活支援においてますます重視される訪問看護の機能を明らかにすることを目指し、多様な地域にある独立型訪問看護ステーションでの調査を進めている。2つ目は、産業看護職のキャリアに関する研究を行っており、本年度は特にキャリアアンカーに関する研究を行っている。3つ目は、保健師のリフレクションに関する研究を行っており、本年度は新任保健師のリフレクションスキルの獲得内容とリフレクション過程に関する研究を主にしている。

また、昨年度から取り組んでいる第三病院との共同研究「地域生活で服薬継続につながるための院内DOTSにおける看護援助」を継続実施し終了した。

「点検・評価」

各研究については、整理した調査データを調査対象者にフィードバックし、さらに各学会でその成果を発表した。今後も、外部研究資金の活用および応募を積極的に行い、研究継続を推進する予定である。また、今年終了した第三病院との共同研究では、その調査結果をとりまとめ、病棟での看護支援の改善および大学病院と地域との医療連携のあり方を明らかにすることができた。この研究結果は、成医会第三支部例会にて発表し学内情報発信することができた。さらに東京慈恵会医科大学雑誌に論文投稿中であり、学外への情報発信を行う予定である。

平成27年度から開始となる保健師の教育課程選択学生が受講する公衆衛生看護学関連の科目・実習内容の検討を鋭意進めたが、授業実施後は教育評価研究につなげて行きたいと考える。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 久保善子, 嶋澤順子, 北 素子, 高島尚美, 高橋 衣, 佐竹澄子, 濱中喜代, 櫻井美代子. ポートフォリオを

用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育の評価。慈恵医大誌 2014; 129(3): 19-127.

今後の発展に期待。労の科学 2014; 69(10): 46-8.

III. 学会発表

- 1) 高橋正也¹⁾, 久保智英¹⁾, 劉欣欣¹⁾ (¹労働安全衛生総合研究所), 東郷史治²⁾, 田中克俊 (北里大), 島津明人²⁾ (²東京大), 久保善子, 内山鉄朗 (神戸製鋼所). 勤務時間に対する裁量権の変化に伴う疲労感と睡眠不全: 日勤群と交代勤務群との比較. 第87回日本産業衛生学会. 岡山, 5月.
- 2) 嶋澤順子, 佐竹澄子, 久保善子, 高島尚美, 北素子, 高橋衣, 濱中喜代, 櫻井美代子. ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育評価. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月.
- 3) 北素子, 嶋澤順子, 高橋衣, 村田洋章, 佐竹澄子, 瀬山留加, 石川純子, 久保善子, 櫻井美代子, 小松一祐, 塩原憲治. 交流セッション: 看護学生の主体的学習能力獲得を支援する electronic-portfolio システムの導入と評価. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月.
- 4) 久保智英¹⁾, 高橋正也¹⁾, 劉欣欣¹⁾, 東郷史治²⁾, 田中克俊 (北里大), 島津明人²⁾ (²東京大), 池田大樹¹⁾ (¹労働安全衛生総合研究所), 久保善子, 鎌田直樹 (神戸製鋼所), 上杉淳子 (理化学研究所). 労働者の Worktime control の変化が疲労と睡眠に及ぼす影響 - 客観指標を用いた 1年間の追跡調査. 第6回 ISMSJ (日本臨床睡眠医学会) 学術集会. 神戸, 8月.
- 5) Kubo Y, Kubo T, Hatono Y. Exploring career anchor among occupational health nurses: a qualitative interview study. 21st Asian Conference on Occupational Health. Fukuoka, Sept.
- 6) 久保善子, 久保智英 (労働安全衛生総合研究所), 嶋野洋子 (九州大). 産業看護職の職務キャリアに関する質的研究. 日本産業看護学会第3回学術集会. 北九州, 9月.
- 7) 村田洋章, 嶋澤順子, 高橋衣, 瀬山留加, 久保善子, 佐竹澄子, 石川純子, 北素子. electronic-portfolio 活用を始めた学生の主体的学習能力とその影響要因の検討 (第一報). 第34回日本看護科学学会学術集会. 名古屋, 11月.
- 8) 安元あかね, 関口智子, 須山悦代, 野村藍, 久保善子, 上田修代, 嶋澤順子. 服薬完遂につげるための院内DOTSにおける看護援助のあり方. 第116回成医会第三支部例会. 東京, 12月.

V. その他

- 1) 久保善子. 学会報告: 日本産業看護学会第3回学術集会「実践科学」の追究を目指して: 産業看護学会の

在宅看護学

教授: 北素子 在宅看護学
講師: 吉田令子 在宅看護学
講師: 遠山寛子 在宅看護学

教育・研究概要

在宅看護学では学部教育として、平成23年度より、在宅看護学概論から演習型授業での在宅看護援助論、在宅看護学実習という一連の学習過程において、在宅看護の特徴を踏まえた看護過程の展開能力修得に重点をおいている。本年度は、その教育評価研究を行った。また、各教員の関心テーマに沿った研究を進めた。

I. 在宅看護学領域における反転授業評価

在宅看護に特徴的なアセスメントの視点を教授するために、従来講義内で実施していた疾患や症状のメカニズムについて e-ラーニングを活用して事前学習を行い、講義の中でアセスメントのポイントを重点的に教授する反転授業を導入した。そこで、反転授業の効果を検証したところ、反転授業の評価として授業目標の1つであるアセスメントポイントの理解度と事前課題であるDVDの視聴の有無による違いは見られなかったため、効果があったかどうかを検証するにいたらなかった。しかし、講義の中における知識の定着としては、高い理解が得られていることから事前にDVDを視聴することで基礎知識を得ることができたと考える。さらに、DVD視聴ツールとしてスマートフォンの活用が増加していったことから、限られた自己学習時間の中で場所やPC環境を問わず視聴することができる有効な手段であると考えられる。

II. 急性期病院における認知症高齢者ケースの退院支援プロセス構築の研究

近年、認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが、その退院支援は困難ケースに挙げられる。認知症特有の困難性に対応した退院支援モデルを開発するための第1段階として、急性期病院の退院支援部門の看護師が関わる認知症高齢者の退院支援プロセスを明らかにする研究に取り組んでいる。本年度は研究調査を開始し、急性期病院の看護師へのインタビューを実施した。

Ⅲ. 訪問看護師が捉える家族介護者との情報共有の実態

在宅療養の現場では、訪問時に適切なケア提供をするためには家族との情報共有はきわめて重要である。訪問看護師が家族との連携において、必要としている療養者に関する情報の具体的な内容や共有方法の実態を明らかにする研究を実施した。看護師と家族間での情報共有は、双方方向というよりは看護師からの情報発信をしている傾向があるという現状が明らかになった。看護師にとっては、訪問していない間の療養者の状態を把握することは、訪問時に確実なアセスメントし、今後の状態の変化を予測するうえでもきわめて重要であることから、同居・非同居を問わず家族との情報共有できるシステムを構築する必要がある。

Ⅳ. うつ傾向のある高齢者にかかわる地域包括支援センター職員の学習ニーズ

地域包括支援センターが担う介護予防事業において、特に対応が遅れているうつ傾向のある高齢者にかかわる職員エンパワメントに必要な学習ニーズを先行研究から整理し、明らかにすることを目的とし文献検討を行った。今後は効果的な学習プログラムの開発のために、地域包括支援センター職員へのアンケートや聞き取り調査を実施していく予定である。

「点検・評価」

在宅看護学では、積極的にアクティブラーニングを取り入れており、その教育評価に継続的に取り組んでいる。今回は反転授業の有効性を検討した。その検討内容を参考に、今後さらなる授業改善を行っていく必要がある。また教育評価研究を継続し、より効果的な教育の実施を目指していく。

各教員が取り組んでいる研究は、いずれも在宅看護学領域では重要なテーマであり、領域内でサポートしあい、さらに発展的に取り組んでゆきたいと考える。

研究業績

Ⅲ. 学会発表

- 1) 遠山寛子, 吉田令子, 北 素子. 在宅看護学領域における反転授業 (Flipped Classroom) 評価. 第34回日本看護科学学会学術集会. 名古屋, 11月. [日看科学学会講集 2014; 34回: 688]
- 2) グライナー智恵子 (神戸大), 北 素子, 大石朋子 (神奈川県立保健福祉大), 磯和勅子 (三重大). 急性期病院における認知症ケアの現状調査. 第34回日本看護科学学会学術集会. 名古屋, 11月. [日看科学学会講集 2014; 34回: 554]
- 3) 嶋澤順子, 佐竹澄子, 久保善子, 高島尚美, 北 素子, 高橋 衣, 濱中喜代. ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育評価. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月. [日看教会誌 2014; 24(学術集会講演集): 208]
- 4) Kita M, Yoshida R, Toyama H. Trends and issues regarding research on support for families of persons with dementia in Japan. BIT's 2nd Annual World Congress of Geriatrics and Gerontology 2014 (WCGG 2014). Taiyuan, Oct. [BIT's 2nd Annual World Congress of Geriatrics and Gerontology Conference Abstract Book 2014; 120]
- 5) Yoshida R, Kita M, Toyama H. Basic research (Vol.2) on network development concerning the preventive long-term care support network. BIT's 2nd Annual World Congress of Geriatrics and Gerontology 2014 (WCGG 2014). Taiyuan, Oct. [BIT's 2nd Annual World Congress of Geriatrics and Gerontology Conference Abstract Book 2014; 129]
- 6) 村田洋章, 嶋澤順子, 高橋 衣, 瀬山留加, 久保善子, 佐竹澄子, 石川純子, 北 素子. electronic-portfolio 活用を始めた学生の主体的学習能力とその影響因子の検討 (第一報). 第34回日本看護科学学会学術集会. 名古屋, 11月. [日看科学講集 2014; 34回: 404]
- 7) 北 素子, 櫻井美代子, 嶋澤順子, 高橋 衣, 村田洋章, 佐竹澄子, 瀬山留加, 石川純子, 久保善子, 小松一祐. 看護学生の主体的学習力獲得を支援する electronic-portfolio システムの導入と評価. 日本看護学教育学会第24回学術集会. 千葉, 8月. [日看教会誌 2014; 24(学術集会講演集): 98]
- 8) Greiner C (Kobe Univ), Kita M, Ohoishi T (Kanagawa Univ of Human Services). Condition of care for patients with dementia at acute hospitals in Japan: comparison with care for elderly patients and analysis of the effect of dementia study experience. GSA 2014: 67th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society. Washington, D.C., Nov.
- 9) 吉田令子, 北 素子, 遠山寛子. 在宅高齢者の介護予防支援ネットワークの環境整備の基礎研究. 日本看護研究学会第40回学術集会. 奈良, 8月. [日看研会誌 2014; 37(3): 161]
- 10) 北 素子. 「看護研究」の落とし穴質的研究の落とし穴 分析の精緻性と研究成果における理論的つながりについて. 日本看護研究学会第40回学術集会. 奈良, 8月. [日看研会誌 2014; 37(3): 84]